



筑紫女学園大学リポジト

Captain Furukawa' s First Experience of Persia in the Meiji Era and its Background

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/215

明治期遣波使節団員古川宣誉のペルシア体認とその背景

大 津 忠 彦

Captain Furukawa's First Experience of Persia in the Meiji Era and its Background

Tadahiko OHTSU

はじめに

昨年（2010年）9月25日（土）、イラン・イスラム共和国大使館（東京都港区南麻布3-13-9）で開催された「吉田正春団長イラン使節団130周年記念セミナー」に、筆者はその発案段階から企画・実施にいたるまで深く携わった。当日の講演題目ならびに講演者は下記の通りである：

- ①「イラン・日本外交開設初期における注目すべき史実」レザ・ナザルアハリ（イラン・イスラム共和国外務省外交文書・研究センター局長）
- ②「遣波使節団員たちとその事績」大津忠彦（筑紫女学園大学教授）
- ③「カジャール朝ペルシアと遣波使節団」ラジャブザーデ・ハーシェム（イラン中世・近現代史ならびにペルシア文学研究家、龍谷大学非常勤講師）

セイエッド・アッバス・アラグチ駐日イラン・イスラム共和国特命全権大使の挨拶で始まり、これを含め通訳ならびに司会・進行の煩務はイラン大使館通訳官稲見誉弘氏が担当。会は終始日本語・ペルシア語二ヶ国語で進行された。会場となった大使館セミナールーム前のロビーには、当日、関連資料や史料書籍および説明パネル等が展示され、参加者の関心を惹いた。なお、当日参加者のうちには、「遣波使節団員」吉田正春（1852～1921年）、横山孫一郎（1848～1911年）の末裔・縁戚にあたる方々も特別招待者として含まれ、大使公邸での昼食会・懇談会においていくつかのスピーチがあった。特別招待者のおひとり元駐フランス大使井川克一氏はイラン・イスラム革命（1979年）時の駐イラン大使であり、奇遇にも、令夫人が明治期遣波使節団々員の末裔にあたり、同氏のご協力によって家伝の勲章（図1右参照）の会場展示が叶い、同日参会者の注目を集めた次第である。

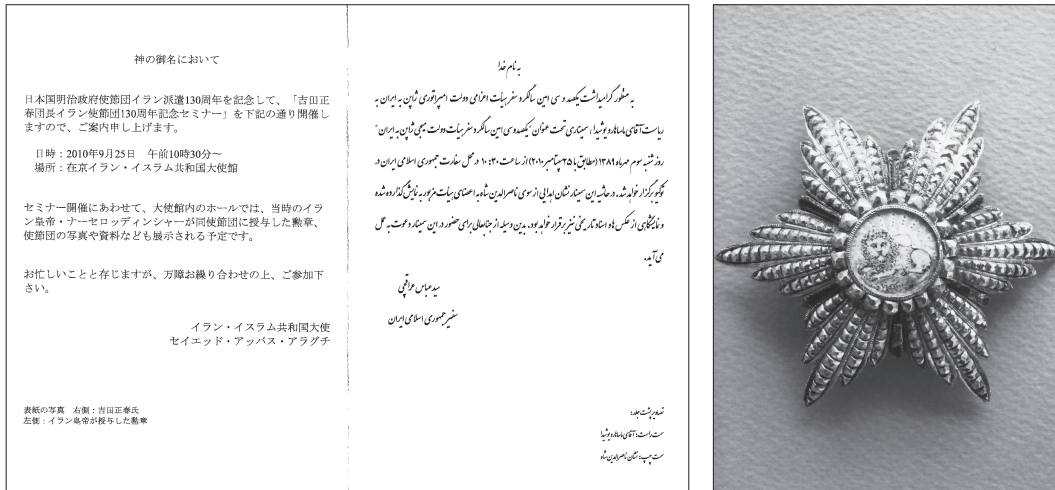


図1 「吉田正春団長イラン使節団130周年記念セミナー」公式招待状の文面(左)および片面に掲載された団員がペルシア皇帝より拝受の勲章(右) (井川克一氏所蔵)



図2 『波斯紀行』表紙

明治期遣波使節団については筆者もこれまで論考や、史料検討の対象としてきた(大津1998, 1999, 2007年)。一行の事績内容は、もちろん公的には明治期外交政策上のことながら、当該従事者にとってそれはいわゆる「異文化」異境の地にあっての冒険・探検という側面も、明治期初期としては当然ながらあった。この事は、彼らの著書、後世研究者の語るところである。使節団派遣を明治政府が決するに到った経緯、あるいはその先後期の様相に関わる国内・対外公文書を論考した中岡によれば、派遣団員にとってその任務下命を受けてより出立までの期間は決して長いものではなかったと考えられる(中岡1985年)。明治期使節団一行が足跡を残した「ペルシア」、西アジアを、おなじく調査・踏査対象地としてきた筆者にとって、

彼ら先覚者たちがペルシア領土に上陸して先ず実見・体感した事項が如何であったかと共に、何を礎、拠り所に、すなわち「予備知識」として未体験の激務遂行にたずさわり得たのが常々関心のひとつとなってきた。本論では、これまでに見出し得た関連資料よりそのいくつかについて集成検討し、爾後の論考のための覚えとしたい。そのために、先ずは古川宣譽著『波斯紀行』(1891年)に拠ってペルシア上陸当初の様相より検討する。

閲覧資料は『波斯紀行』(古川1891年、挿図は国立国会図書館近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/988963> より引用)であり、本論中のページ表記はこれに拠ったことを意味する。原文の漢字・カタカナ表記は漢字・ひらがな表記にあらため(ただし非濁音表記、旧仮名遣い表記はそのまま)、いわゆる「合略仮名」は現代表記にした。なお、地名「プーシール」(=「バンドルアプーシール」)は、引用文の場合以外、こんにちのペルシア語表記に準拠して「プーシェフル」と表記する。

I. ブーシェフル滞留期間

i. 6月29日～7月25日の記録：何を体認したか

4月6日に品川を出立してのち海路85日間の刻苦を経て、古川はペルシア湾の港市ブーシェフルに6月29日「午後三時衆と俱に上陸」(151頁)。この到着そして上陸の時期は、筆者のイラン踏査経験から推しても、ブーシェフルの気候は酷暑激烈のまさに最中であつたはずである。はたして、到着6月29日付日誌の書き出しには「本日午時船中蔭所に於て試むる所の寒暑針九十八度(=36.6℃、筆者注)を示せり陸上の暑熱想ふ可し」(150頁)とある。したがって、7月1日付

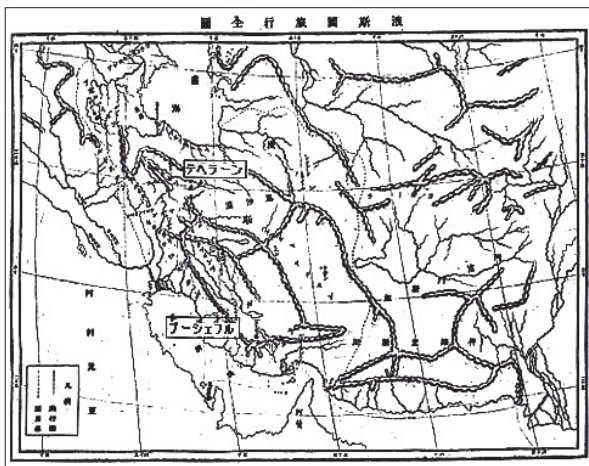


図3 ブーシェフルの位置(吉田1894年所収地図へ加筆)

日誌には「是地炎暑酷烈且つ雲翳の日光を遮るなきを以て晝間は外出するに由なし因て午前五時三十分日脚の未だ高からざるに乘じ驢馬を賃し近郊を散策せんと欲し寓居を出で(後略)」(154頁)との配慮が見られる具合である。後述するように、きっとそれまで未体験の酷暑に圧倒されたに違いないであろうが、しかし古川の使命遂行については到着早々より確実で真摯な様子を「日誌」の随処に窺うことができる。ブーシェフル滞在のおよそ4週間は、その後テヘラーンまでの刻苦陸行に備えるべきいわば「ならし」期間といえるかもしれない。

期間中、軍人古川の観察眼は先ず身近な存在であるブーシェフルの街、住人、兵營へ注がれ、そして自身の行動範囲の拡大と相俟って次第にペルシアの風土、習俗等へと拡がる。責務をはたす義務感から当然記されるべき諸事項と共に、はじめて対峙する異国ならではの奇妙・奇異に映る事象が日誌に記録されて行く。どちらかといえば無機的文体で沈静に綴られながら、そのことがかえって古川に与えた印象の強烈さを物語っているとも思われる。以下、ブーシェフル滞在中に古川がはじめて眼にし、そして異郷の地の何をどのように受容したかについて、日誌記述事項より集成してみよう。(以下、筆者が読み取った日毎の抜粋記事部分を「」付で記す。便宜上その内容を見出し的に《 》内に記した。引用文中の□は判読不能あるいは適字不詳の意。)

6月30日：

《街内道路状況》「塵芥獸糞堆積し間□交ゆるに馬骨と猫犬の屍とを以てし其汚穢言を可らす」「道路の墓地を犯して過るあり絶えて溝渠□石等の設なし況や道路を照す可き街燈に於てをや」
《家屋建築》「家屋の建築は粗なる輒石或は海中に於て凝固したる土砂質の石を以てし屋上は皆平坦にして塗るに沙土を用ゆ」

《屋上露営》「厩の上層にして日傾けは我輩露座して食し或は星を戴て眠り或は更に樓の屋上に登りて涼を納る恰も野営を張る者に異ならず実に奇と謂ふ可し」

《官職売買》「此官（＝府知事、筆者注）は従来金を納て之を買ふ可し但し現在は少しく之を耻ちて禁する所ありと雖ども風俗の訓致する所未た其跡を絶つに至らず恰も支那と同一轍なり」

7月1日：

《沙漠》「望見するに其沙磧の広漠なる恰も海の如く」

《水質》「此地方第一の良水なれども石鹼を鎔解し使用せんとするに曾て其効を見ず以て塩分多きを知る可し」

《皮袋》「遠地より飲料水を運送する其方法は羊皮を袋にし〔是れ羊の頭と肉とを去りたる者を縫合せし袋にして水を容る、時は純然首なき羊の如し〕水を盛り驢馬或は婦人をして之を負はしめ毎朝陸続として府内に運送す」〔〕内は原著者による注釈文

《岩塩》「バンドルアバスとリングの間なるキスムと号する一海島より産する山塩を見る其色純白玲瓏として玉の如く其質堅くして水晶に似たり形も亦水晶根の如く之に水を灌くも鎔解せすと云ふ抑々亦奇品なり」

《回教人》「此宗徒即ち波斯人にハジの号を冠する者甚た多く是等の人は皆必ず一たひメツカに参拝せし者と云ふ以て宗教の人心に浸染する甚た深きを知り併せてメツカの繁盛を證す可し」

7月2日：

《魚》「鮮魚一尾を得たり乃ち儲ふる所の醬に浸し之を喫す八珍の滋味も亦及はざるを覚ゆ」

7月3日：

《熱氣》「熱氣の肌に威する恰も機管中より吹き送れる蒸発気の如く□蒸殊に甚しく呼吸為めに迫り懊悩に堪へず」

7月7日：

《バザール》「印度地方の如く茲にも亦「バザール」と称する者にして一区を成したる市場なり其上部は穹窿形の屋を覆ひ道路の幅甚た狭くして両側の店頭には百貨を陳列し布帛器具肉類蔬菜等求めて得ざるなし然れども市場都て暗黒にして汚辱を極め臭気鼻を衝き為めに呼吸を停るに至る」

《禁酒》「平生飲酒するは教法の嚴禁する所にして若し之を犯す者あれば足趾を無智管つの刑を加へて之を懲戒す」

《早婚》「此地方の女子八歳已上に至れば結婚する者あり蓋し八歳を以て成人の期と為す者の如し嘗て熱地は寒地よりも婚期の早きを聞けり然れども女子八九歳にして結婚するか如きは尤も一驚を喫したり」

7月11日：

《酷暑》「本日は着港以来の酷暑にして身海辺に在りと雖も恰も釜中に在るか如く日光の照らす処を見れば眼為めに眩し室内の物に触る、も手為めに灼くか如きを覚え懊悩苦悶して呻吟の聲

を絶つ能はず日暮を待て海水に游泳し少しく熱を避るを得たり」(引用者注：気温記録値は華氏102度、すなわち38.9℃。この日より、居所を海岸に在るオランダ商人家の一室へ替える。)

7月12日：

《接遇》「通常応答の後棗椰子醸造の「シャルベト」〔□酸の如くにして甘し口中の粘液を去るに妙なり〕次に茶次に珈琲を薦む此三品は波斯の風習として必ず賓客に供する者とす」

7月13日：

《暑氣払い》「黎明及び日暮海水に浴して熱を洗ふ」

7月16日：

《苦熱》「流汗淋漓として紙筆に滴り苦熱特に甚し」

7月17日：

《炎熱》「炎熱特に甚し夜中九十五度に至る」

7月18日：

《暑熱》「暑熱酷烈一事を為す能はず」

7月21日：

《酷熱》「晴九十七度熱甚し 即今酷熱夜に入るも九十三四度より下らず為に眠に就く能はず夜半屋上に登り涼を納るれば湿気肌に満ち衣袂皆湿身心甚た快からず乃ち被覆を設けて屋上に臥し困倦極マル後僅に眠に就けは已□陽の東天に昇るあり誤て之を知らず少しく頭顱に日光を受くれは忽ち血液上昇し衄血淋漓たり驚て階を下り室内に入れは炎日窓櫺を照して烈火の如く復た避く可きの地なし苦悶も亦甚し」

7月23日：

《雲翳》「本日午前中天に少しく雲翳あるを見る此国に入りし已来雲を見るは今日を以て始とす」

7月24日：

《馳走》「唯種々の味を雑へたる米飯の如きは頗る日本人の意に適したり又其色黒く味噌に水を和したるか如き醬あり是れ柘榴と胡桃とを以て醸したる者にして酸味を帯ひて美なり」

《妻帯等風俗》「此国人は都て教法の定むる所に従ひ妻四名を娶るを得可し又離婚の後再ひ之を納るゝも妨げなし唯一婦人を斯の如くすること三度なるときは復た之を納るゝを許さず妾を娶る定数なし幾人を納るゝも禁する所に非す又財産分与は嫡子庶子の別なし唯男子受くる所は女子に倍するを法とす嗚呼此国人にして妻を娶る者は四人の婦人を再三□して一生十二度の婚儀を行ふを得可し豈奇怪の風俗ならずや」

7月25日：

《慰勞錢》「午後外務官の従僕等数名来り慰勞錢を乞ふ是れ此国の風習なり因て余輩は此僕等並に番兵及舎館の僮僕等に与ふるに数両の銀を以てす」

《夜行》「即今暑熱烈しきを以て夜行せざるを得ず故に午後を俟て発するなり」

ii. 気象の差異

日誌に頻出する事項は上陸地ブーシェフルの暑さに驚嘆・苦悩し、寝場所を工夫したり、水浴びをしたり等、酷暑を凌がんとする様相である（日誌6/29,6/30,7/3,7/11,7/13,7/16,7/17,7/18,7/21,7/25付）。古川大尉の体感した陽射しは「烈火の如く（7/21）」、ために「一事を為す能はず（7/18）」、その後のテヘラーン行は「夜行せざるを得ず（7/25）」との判断に至ったほどであった。実際のところ、『理科年表』（国立天文台編纂、1992年）によれば、ブーシェフルの月別平年気温（℃、1951-1979年統計）は6月30.5℃、7月32.5℃、8月32.5℃である。それはこのミッションの出発地東京の6月21.7℃、7月25.2℃、8月27.1℃（1961-1990年統計）と比較してはるかに高温である。そして「此国に入りし已来雲を見るは今日を以て始とす（7/23）」と観察されたごとく、これほどの高温をもたらす連日晴天の様もまた、『理科年表』記「月別平年降水量（mm）」を6月－7月－8月についてブーシェフルと東京について比較すると、前者は「2.0-1.2-2.8（mm）」（1951-1979年統計）、後者は「185.2-126.1-147.5（mm）」（1961-1990年統計）となっており、差異は歴然である。さらに、同書「月別天気日数（1961年から1990年までの平均値）」によれば東京の6月－7月－8月の快晴日数はそれぞれ「1日－1日－2日」であり、曇・不照日数が各月「27日－23日－15日」である。差異著しい気象下に晒されたことが統計数値からも歴然としている。爾後のテヘラーン行においてもまた、気象の厳しさ（暑さ、高所における急激な気温変化等々）は常に強い関心事のひとつとして持続される。

iii. 乾燥地と飲食物

ブーシェフル上陸当初の止宿処は煉瓦造り・陸屋根の建物であったらしい。その屋上が生活の場になっていたことを奇とするも、体験的に就寝時の涼を求めるべき適所として当該地における合理性を理解したらしく思われる（6/30,7/11）。

ブーシェフルが乾地であることは夏期の少雨（前記）からとともに、「沙磧の広漠（7/1）」の様より古川大尉にはうかがい知れた。彼の「恰も海の如く」との形容は、後年、倫理学者あるいは文化史家として知られる和辻哲郎（1889～1960年）がその著『風土－人間学的考察』（1935年）に「沙漠」という言葉は我々がシナから得たものである。これに相応する日本語は存しない。「すなはら」は沙漠ではない。厳密な意味において日本人は沙漠を知らなかった。（中略）それは巨大なる砂海であり、その砂が狂飆^{きやうほう}によって巻き揚がり流れるのである」（1928年稿、1929年加筆、和辻1979年）と表わすところの「砂海」、あるいは江戸時代の天文・地理学者の西川如見（1648～1724年）が著した『増補華夷通商考』巻五「外夷増附録」の「アラビヤ」の項に、「又此ノ国ニ日本道三百余里ノ沙地アリ大風起ルトキハ沙ヲ吹テ浪ノ如ク行旅ノ人偶ニニ遇トキハ則沙浪ノ為ニ埋マル」（国立国会図書館近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991284>『増補華夷通商考』5巻）と表わすところの「沙浪」に相似する見方として興味深い。

乾燥地ブーシェフルにおける水については、石鹼が役立つほどに「塩分多」いこと（7/1）、そして、遠隔地よりいわゆる「皮袋」で運ばれてくること（7/1）、また、それが婦人の労働に

なっていること（7/1）を看取している。

飲食物については、府知事訪問時のもてなし品としての「シャルベト」、「茶」、「珈琲」のほか、口に合ったらしいものとして「種々の味を雑へたる米飯」および「其色黒く味噌に水を和したるか如き醬」が記されている。後者は「酸味を帯ひて美なり」と好評であったらしいが、これは「柘榴と胡桃とを以て醸したる者」との説明から、ザクロ・ソースの甘酸っぱさでこんにち日本人受けの良いペルシア料理のひとつとなっている「フェセンジャン」のことと思われる。

しかし、概して、一行にとって現地食はあまり好みに合わなかったらしいと思われる。なぜならば、7月2日付日誌中に、おそらく持参していたらしい醤油で「鮮魚」を食したのが「八珍の滋味」も及ばないと賞されている具合だからである。このことは、後日の道中8月29日付日誌中に、「午前寓舎前の小流にて蚊蠅を網とし小魚二三十を漁し之を食す旅中醬酢を得る能はずと雖も凡三十有余日間魚肉を食はざるを以て其味頗る佳なるを覚ゆ」とあることとも呼応し、異郷の不慣れな食に悩む様子が伺われるのである。

Ⅱ. 沙漠体認の予察

「恰も海の如く」（古川1891年）、「沙浪」（西川1708年）あるいは後世の「砂海」（和辻1935年）との表現ながら、一体、古川大尉にとって沙漠に関する予察の如何、そもそも日本人が「沙漠」を実見にもとづいて描述した最初の事例はどこに求めるべきであろうか。1200年代前半成立と云われる『平家物語』中、「かの玄奘三蔵の流砂葱嶺を凌がれたりけん悲しみも、これにはいかでかまさるべき」（巻八「太宰府落」）に見出される「流砂」が、「タクラマカン沙漠」の意であるとも言われるが、もちろん、これは『平家物語』作者の実見ではない。また、西川著『増補華夷通商考』（1708年）には前記「沙浪」以外に、いくつかの乾燥地域に関する描写がみられる：

- ・「パピロウニヤト云ウ国アリ十年三度稀ニ雨フル事有リテ常ハ雨降事ナキ国ナリト云」（「アラビヤ」の条、典拠同前）
- ・「此ノ国雨降事ナク常に雲気ナシ」（「エジプト国」の条、典拠同前）

しかしながら、これらは伝聞あるいはなんらかの外国文献からの知見に拠るものと考えられ、管見のかぎりでは、福澤諭吉（1834～1901年）が1862（文久2）年、幕府の遣欧使節に随行しヨーロッパ諸国を巡遊した際の日記とされる「西航記」中の記述が、実見に拠る描術の嚆矢ではなからうか。『福澤諭吉全集』第19巻（岩波書店1962年初版、1971年再版、以下「全集」）所収によれば、使節団は文久元年12月23日「朝六時品川出帆」（全集p. 7）。翌年、すなわち文久2年（＝1862年）2月12日「夜第二時^{あいでん}亞丁に着。○亞丁は「アラビア」の南岸、紅海の海口にあり」（全集p. 14）。同月20日「朝第六時半シュエズ港に着す。港内水浅して直に着岸すべからず。陸を距る二里許の処に碇を卸す」（全集p. 15）。同月21日「第十一時川蒸気船に移り上陸す。（筆者中略）第二時蒸気車に乗りシュエズを發し、第七時三十「ミニユート」「カイロ」に着す。「シュエズ」より「カイロ」の鐵路七十二里」（全集p. 15）。この後、沙漠に関わる記述を観ることができる：

「○「シュエズ」より「カイロ」までの間は概ね皆砂山にして満目林樹なし。唯だ七里八里毎に鉄路の傍に小屋兩三軒ありて蒸気車の欠乏品を給するに備ふ。此地終歳雨少く、屢々大風あり。風勢最も劇き時は砂山之が為めに処を移すことありと云」（全集p.15-16）。

また、福澤はこの後一般向けとして次のように「沙漠」を解説している：「広き砂原に雨降らずして草木生長せざるものを沙漠くさきという。亜非利加しやばく、荒火野の沙漠あらびや、これなり。日本には砂漠なし」（福沢諭吉著『世界国尽』附録（1869年）所収「自然の地学」より、『福澤諭吉著作集』第2巻、2002年、慶応義塾大学出版会、p.151）。

Ⅲ. ペルシア体認の予察

沙漠については福澤諭吉によって、すでに明治初期には啓蒙的に、それがいかなるものであるか実体験に裏打ちされた情報として紹介されていた。もっとも、それはエジプトの乾地の事例であってペルシアのそれとは異なる、あるいは沙漠として同様であるということ述べた性質のものではない。先覚者として福澤のペルシア理解・解説はいかがであったろうか？すなわち、古川が持ち得るペルシアに関する予備知識の可能性はたとえばいずれに求め得るであろうか。はなはだ初歩的予察ながら、三つの事例を捕まえておきたい。

ひとつは前掲『増補華夷通商考』（1708年）の「ハルシア」の条に著わされたペルシアである（便宜上、原典漢字・カタカナ混じり文は漢字・ひらがな表記に改変し、ルビ省略）：

「日本より海上五千百里 南天竺の西邊也即西天竺の内也と云此の国天竺の開闢の最初の地なるよし黄金の大塔あり十五里の外より見ゆると云国王ありて仕置す国民富饒なる由四季日本唐国に同じ但暖気なる国なり人物もうるに同じ 此国の南海に一島あり其土地悉く塩と硫黄にて草木生ずる事なく鳥獸も不栖其氣候常に暑熱有て地震甚多き地也然れども能湊ある故に諸国往來の商船此の湊に集て財宝富饒なる處の由」（西川忠亮編西川如見遺書 第1-18編 2巻第4編 『増補華夷通商考』 5巻より：国立国会図書館近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991284>）。

いまひとつは、禔理哲(Richard Quarterman Way, 1819~1895年)著 箕作阮甫(1799~1863年)訓点『地球説略』(1860年)をその先行文献とする福田敬業(1818~1894年)による『地球説略訳解』(1875年)所収の「比耳西亜国ペルシア図説 又タ波斯ト名ク」の条が著わすペルシアである。これはブーシェフル滞在以降の古川大尉のペルシア観察日誌の好比較資料と成り得る稀覯本のひとつでも

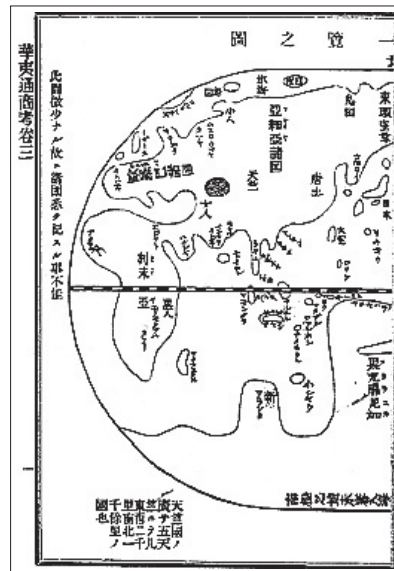


図4 「地球万国一覽之図」
(西川1708年より)

あるので、やや長くなるが、爾後の便宜を期して、該当箇所をここに抜粋・引用しておきたい(原著の漢字・カタカナ混交文は、便宜上、漢字・ひらがな表記に改変し、傍線は省略。□は判読不能あるいは、適字不詳の意。なお、引用挿図は2点とも国立国会図書館近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/info.ndl.jp/pid/761338>より) :

「^{ベルシヤ} ^{アジア} ^{よこすぢ} ^や ^{たてすじ}は ^{シナ} ^{にしつめ} ^{北京} ^の ^{偏西} ^{より} ^{起り}、^{七十二} ^度 ^に ^至 ^て ^止 ^む、^長 ^二 ^千 ^里、^広 ^二 ^千 ^五 ^百 ^里 ^総 ^計 ^二 ^百 ^万 ^里、^東 ^は ^ア ^フ ^ガ ^ニ ^ス ^タ ^ン ^ペ ^ル ^ヂ ^ス ^タ ^ン ^に ^界 ^し、^南 ^は ^{ベルシヤ} ^{カイ} ^に ^界 ^し、^北 ^は ^カ ^ス ^ビ ^セ ^セ ^に ^大 ^布 ^加 ^リ ^ア ^に ^界 ^す、^其 ^百 ^姓 ^は ^共 ^に ^一 ^千 ^二 ^百 ^万 ^の ^数 ^を ^り、^京 ^城 ^の ^地 ^を ^第 ^布 ^蘭 ^と ^名 ^く、^其 ^城 ^は ^週 ^圍 ^十 ^四 ^里 ^{あり} ^て ^極 ^め ^て ^鞏 ^固、^京 ^城 ^の ^内 ^の ^民 ^は ^約 ^十 ^三 ^万 ^{あり}、[○] ^述 ^る ^所 ^の ^教 ^は ^初 ^本 ^は ^火 ^を ^拝 ^{する} ^を ^以 ^て ^重 ^と ^為、^柴 ^を [□] ⁽ ^く ^さ ^か ^ん ^む ^り ^に ^熱 ⁾ ^き ^新 ^に ^燃 ^し ^日 ^に ^向 ^ひ ^て ^拝 ^し ^名 ^け ^て ^大 ^陽 ^教 ^と ^曰 ^ふ、^後 ^其 ^国 ^回 ^部 ^の ^為 ^に ^奪 ^れ ^始 ^て ^改 ^め ^回 ^教 ^に ^従 ^ふ、^是 ^に ^於 ^て ^回 ^々 ^教 ^遂 ^に ^大 ^に ^重 ^し ^然 ^れ ^ど ^も、^今 ^に ^い ^た ^り ^火 ^を ^拝 ^{する} ^者 ^尚 ^数 ^万 ^人 ^{あり}、[○] ^其 ^人 ^民 ^を ^論 ^ず ^る ^に ^亞 ^細 ^亞 ^洲 ^の ^内 ^に ^在 ^り ^て、^最 ^聰 ^敏 ^と ^為、^最 ^端 ^方 ^と ^為 ^す、^{男子} ^の ^言 ^詞 ^は ^文 ^飾 ^和 ^藹 ^に ^{して}、^親 ^可 ^く ^女 ^人 ^の ^容 ^貌 ^は、^俊 ^雅 ^に ^{して} ^嬌 ^媚 ^な ^る ^こ ^と ^観 ^る ^可 ^し、^性 ^の ^尚 ^ぶ ^所 ^は ^服 ^の ^飾 ^を ^最 ^と ^為 ^す、^故 ^に ^衣 ^冠 ^の [□] [□] ^{なる} ^者 ^比 ^比 ^皆 ^然 ^り、^又 ^富 ^き ^の ^家 ^の ^女 ^は ^身 ^に ^長 ^き ^衣 ^を ^穿、^頭 ^の ^上 ^耳 ^の ^邊 ^に ^金 ^銀 ^珠 ^玉 ^を ^掛、^再 ^ひ ^紉 ^綾 ^を ^以 ^て ^之 ^を ^紮 ^る、^如 ^し ^外 ^へ ^出 ^る ^こ ^と ^あ ^ら ^ば ^面 ^の ^前 ^に ^長 ^き ^布 ^を ^蔽 ^ひ ^祇 ^眼 ^を ^出 ^す ^だ ^け ^を ^置 ^る、^意 ^に ^人 ^に ^見 ^ら ^る、^こ ^と ^を ^欲 ^せ ^ざ ^る ^に ^在 ^る ^也、^其 ^風 ^俗 ^は ^宴 ^會 ^を ^尚 ^び ^{歌舞} ^を ^喜 ^ぶ、^又 ^多 ^力 ^し ^て ^善 ^く ^射 ^る、^婚 ^配 ^は ^一 ^男 ^に ^{して} ^数 ^婦 ^に ^至 ^る ^可 ^し、^学 ^習 ^端 ^は ^若 ^く ^は ^天 ^文、^若 ^く ^は ^算 ^法、^若 ^く ^は ^医 ^道、^皆 ^最 ^喜 ^ぶ ^所 ^と ^す、^唯 ^交 ^際 ^の ^間 ^は ^專 ^虚 ^文 ^を ^尚 ^び、^忠 ^信 ^少 ^け ^れ ^ば、^未 ^だ ^善 ^ざ ^る ^に ^似 ^た ^る ^な ^り、^又 ^憂 ^慮 ^{ある} ^に ^遇 ^ば ^輒 ^鴉 ^片 ^を ^食 ^ひ ^て ^以 ^て ^悶 ^を ^散 ^す、^百 ^姓 ^の ^芸 ^事 ^は ^国 ^の ^中 ^広 ^野 ^多 ^き ^に ^因 ^り、^牧 ^馬 ^牧 ^牛 ^を ^以 ^て ^業 ^と ^為 ^し、^羊 ^の ^毛 ^を ^剪 ^織 ^て ^布 ^呢、^毡 [□] ⁽ ^毛 ^ヘ ^ン ^に ^且 ⁾ [、] ^等 ^を ^為 ^る ^皆 ^推 ^称 ^と ^す ^る ^所 ^な ^り、^住 ^す ^る ^屋 ^宇 ^は ^極 ^て、^寬 ^敞 ^に ^極 ^て ^整 ^雅、^地 ^上 ^に ^皆 ^毡 [□] ⁽ ^毛 ^ヘ ^ン ^に ^且 ⁾ ^を ^鋪 ^き ^屋 ^毎 ^と ^一 ^進 ^し、^中 ^間 ^に ^空 ^虚 ^一 ^間 ^を ^留 ^め、^或 ^は ^坐 ^談 ^し、^或 ^は ^飲 ^食 ^す、^而 ^し ^て ^四 ^邊 ^に ^門 ^戸 ^を ^開 ^き ^設 ^け ^て ^各 ^人 ^の ^臥 ^室 ^を ^便 ^に ^す、^又 ^進 ^毎 ^に ^必 ^ず ^浴 ^房 ^一 ^間 ^を ^留 ^む、^王 ^宮 ^の ^若 ^き ^は ^石 ^を ^臺 ^と ^為 ^す ^に ^平 ^方 ^に ^し ^て ^高 ^台 ^の ^如 ^し、^樑 ^柱 ^を ^用 ^ひ ^ず、^瓦 ^壁 ^の ^中 ^を ^敞 ^に ^あ ^け ^虚 ^室 ^十 ^間 ^と ^な ^し、^窗 ^牖 ^門 ^扇 ^の ^る ^い ^は ^悉 ^く ^花 ^紋 ^を ^彫 ^宏 ^く ^麗 ^し ^き ^こ ^と ^比 ^ひ ^無 ^し、^食 ^ふ ^所 ^の ^物 ^は ^米 ^粟 ^及 ^び ^菓 ^子 ^等 ^を ^以 ^て ^主 ^と ^為 ^し、^肉 ^食 ^す ^る ^は ^罕 ^り、^但 ^し ^地 ^上 ^に ^坐 ^し ^桌 ^せ ^ず、^椅 ^せ ^ず、^刀 ^必 ^匙 ^箸 ^を ^用 ^い ^ず、^手 ^を ^以 ^て ^之 ^を ^撈 ^は ^誠 ^に ^未 ^だ ^雅 ^き ^に ^は ^い ^た ^ら ^ず、^人 ^民 ^来 ^往 ^す ^る ^に ^は ^多 ^く [□] ^馬 ^駱 ^駝 ^を ^用 ^ゆ ^而 ^し ^て ^舟 ^楫 ^も ^間 ^之 ^有 ^る ^な ^り [○] ^其 ^地 ^土 ^を ^論 ^ず ^る ^に、^亞 ^細 ^亞 ^洲 ^の ^諸 ^国 ^に ^て ^昔 ^日 ^は ^較 ^較 ^聲 ^名 ^{あり} ^し ^が ^峨 ^羅 ^斯 ^土 ^耳 ^其 ^亞 ^加 ^業 ^坦 ^の ^三 ^国 ^と ^交 ^戦 ^ひ ^敗 ^れ、^を ^と ^り ^て ^其 ^地 ^を ^分 ^ち ^裂 ^き ^し ^よ ^り、^国 ^の ^權 ^勢 ^昔 ^日 ^に ^較 ^は、^甚 ^た ^削 ^し ^た ^り、^百 ^姓 ^の ^居 ^所 ^處 ^は ^西 ^北 ^の ^地 ^最 ^衆 ^く、^東 ^南 ^之 ^に ^次 ^ぐ、^又 ^共 ^に ^八 ^部 ^に ^分 ^ち、^東 ^に ^在 ^る ^を ^哥 ^喇 ^森 ^と ^曰 ^ひ、^其 ^内 ^に ^大 ^ひ ^{なる} ^曠 ^土 ^一 ^つ ^有 ^り、^大 ^延 ^曠 ^と ^名 ^け、^人 ^民 ^稀 ^少 ^草 ^場 ^に ^し ^て ^羊 ^馬 ^を ^孳 ^息 ^所 ^と ^し ^南 ^に ^在 ^る ^を ^克 ^再 ^曼 ^と ^曰 ^ひ、^又 ^法 ^再 ^斯 ^と ^曰 ^ふ、^其 ^内 ^に ^湖 ^一 ^つ ^{あり}、^塩 ^湖 ^と ^名 ^け ^人 ^国 ^の ^食 ^ふ ^所 ^の ^塩 ^は ^皆 ^此 ^よ ^り ^出 ^て、^且 ^其 ^塩 ^極 ^め ^て ^美 ^に ^{して} ^口 ^に ^可 ^ふ、^北 ^に ^在 ^る ^を ^亞 ^達 ^皮 ^張 ^と ^曰 ^ひ、^其 ^蘭 ^と ^曰 ^ひ、^馬 ^散 ^地 ^蘭 ^と ^曰 ^ふ、^西 ^に ^在 ^る ^を ^吉 ^斯 ^丹 ^と ^曰 ^ふ、^其 ^内 ^に ^沃 ^土 ^{あり} ^大 ^江 ^{たり} ^灌 ^漑 ^て ^資 ^と ^す ^る ^に ^足 ^り、^他 ^の ^部 ^に ^較 ^ば ^国 ^中 ^の ^美 ^地 ^に ^{して} ^勝 ^り ^と ^為 ^す ^な ^り ^又 ^以 ^て ^辣 ^と ^曰 ^ふ、^即 ^京 ^城 ^第 ^希 ^蘭 ^の ^建 ^所 ^處 ^又 ^大 ^城 ^一 ^つ ^有 ^り、^義 ^斯 ^巴 ^恒 ^と ^名 ^く、^旧 ^の

京城なり、城内の書院は回々堂甚多く建る所の屋宇極めて壯麗ければ見る可し、西の方に高山一帯あり、克第斯丹と名く、本国と土耳其国との分界の所なり、初め国中に大城数ヶ所ありて、城内地広く、人衆く、房舎極めて美しかりしよしなれど、今は僅に故の址を存せり、○出す所の土産は毡□(毛ヘンに且)、呢羊毛布、絹、緞、葡萄酒、菓子、甘蔗、百百種の佳菓、磁器、金、銀銅、鉄塩、等にて獸畜には棉羊、良馬、驢子、騾子あり、



図5 『地球説略訳解』表紙(左)およびペルシアの条の一節(右)(福田1875年より)

いまひとつは福澤諭吉著『世界国尽(せかいくにづくし)』(1869(明治2)年)所収の「亜細亞洲の事」ならびに「亜細亞洲」が著わすペルシアである：

- ・「○辺留社は旧国なれども、元來人氣粗く、政事向暴虐にして下々の取扱よろしからざるゆえ、国の力、次第に衰え、當時に至ては文武ともに引立ず、千八百十三年(文化十年)、千八百二十八年(文政十一年)、魯西亜と戦い、両度とも敗北して大に土地を失えり。近來は英国と交りて英の士官を雇い武備を整るよしなり」(巻一、「頭書図入」部、著作集第2巻、80頁)
- ・「印度」の西の国々は「阿夫賀仁須丹」「土留喜須丹」、みなみの端の「尾留知須丹」、独立国の名あれども風俗粗き夷狄のみ。西に進て「辺留社」は世にも所謂古国なり。紀元以前六百年、「白洲王」といえる君、隣の国をほろぼして武威を「亜細亜」に轟かし、次で二千有余年、時代移り物かわり一時「蒙古」に攻取られ、千五百年のころにまた政府一度改り「富肥」の世

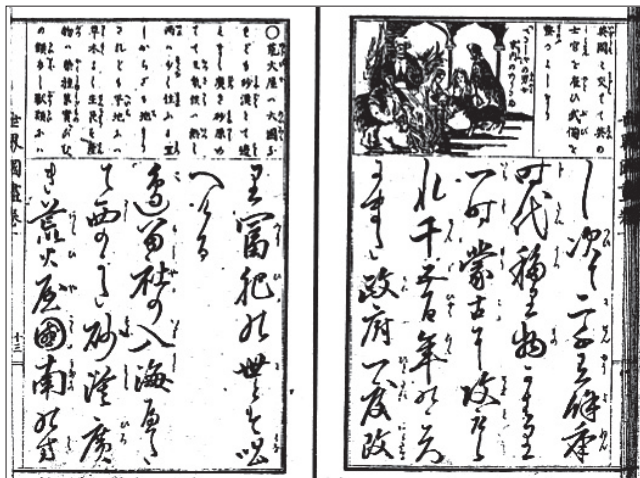


図6 『世界国尽』よりペルシアの条の一節(福澤1869年より)

とぞ唱えける」(巻一、著作集第2巻、79, 80頁、挿図は国立国会図書館近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761278>より)。

IV. 異文化への視座

古川大尉が、実体験に基づいたものを含め、ペルシアに関する情報をその出立前に得ることが出来るとすれば、たとえば上記書物からであったであろうと考えられる。いずれも物理事象の記載に弱冠の歴史を付加するいわゆる「風土記」風となっている。著作者の判断的内容としては、たとえば「^{べるしや}辺留社は旧国なれども、^{あら}元来人気粗く、^{せいじむきほうげき}政事向暴虐にして下々の取扱よろしからざるゆえ」(福澤『世界国尽』)くらいでありながら、いますこし福澤の著作を渉獵すると次のような件もみいだされる：

「^{ごと}ペルシヤ人の如き、^{もうまい}無智蒙昧なるが故に^{やむ}止を得ずして虐政の下に立ち、君主一人の独断にて随意に^{まつりごと}政を^{いえ}施すと雖ども、^{かつ}人民これに安んじて^か皆て怪む色なし。文明の化を被り^{ヨヨーロッパ}礼儀の教に浴したる^{おいら}欧羅巴人に^{しか}於ては然らず」(福沢諭吉著『西洋事情』外編 卷二『福澤諭吉著作集』第1巻、134頁、1868年)。

すなわちここにみられるペルシア(人)観は、「^{あら}元来人気粗く」や「^{ごと}ペルシヤ人の如き、^{もうまい}無智蒙昧」、とあまりよろしくはない。しかし、古代逸話ながら、ペルシア(人)観について福澤には次のような翻訳文を含むいわゆる啓蒙書があることは留意されるべきであろう：

「(イ) ペルシヤの百姓の事 人の^{たつと}位貴しと雖ども、^{いや}賤しき人の礼儀には感ずるものなり。人の暗い^{はまれ}賤しと雖ども、^{そもそも}礼儀を尽せば^た誉を得べし。抑人の^{じょうあ}重んずる所のものは、^よ礼儀の贈物にもあらず、又その儀式にもあらず、^{ただ}唯その^{じょうあ}礼儀の生ずる情合と、^よ礼儀を尽す仕方の^よやさしき所を悦ぶなり。故に^{【附】}王公貴人、^か大造なる物を人に与えて、^か却て人心の^か帰服を得ざることあり。然るに見るかげもなき^{きさい}賤しき者の^あ礼儀を尽して^あ些細の物を贈るか、^あ或は全く物を贈らざるもその^{ふるまい}挙動の^よやさしききによりて大に^よ誉を得ることあり。譬えば^た英吉利の君、^{イギリス}第一世チャレスは、人に物を与えて^よ惜むことなかりしと雖ども、^あ礼儀の法を知らざりしゆえ、人を悦ばしむること^い能わざりしと云う。

^{むかし}往古ペルシヤの国にて、^あ或る百姓、その^あ国王アルタキセルキスの^あ通行せらゝを見て、何か物を進ぜたく思えども、^{かな}身に叶わざるまゝに、^{あたり}傍の小川に走て^{すく}両手に水を掬い、^{これ}之を^{たま}飲み給えとて^た国王に^た献りければ、^あ王もこの^あ奇なる^あ贈物を見て^{おかし}可笑くは^{おも}思たれども、その^{こころざし}志を感じて^あ厚く^あ礼を述べられたり。さればこの^{ようぼう}百姓の^き容貌こそ^き穢き^き下民たれども、その^あ心の美なるは^あ君子の^あ人と云うべし。』

これは1872(明治5)年刊『童蒙教草』巻之二、第九章「礼儀の事(イ) ペルシヤの百姓の事」(引用原典は福澤諭吉著作集 第2巻pp.220-221)からの一節であり、その基は英国Chambers社刊 *The Moral Class-book* とみなされる(福澤諭吉著作集 第2巻p.412)。「国王アルタキセルキ

ス」すなわちアケメネス朝ペルシア王「アルタクセルクセス」のいかなる歴史上の逸話に由来するか、また、なぜこのような逸話として伝わったのかについては稿を改めるとして、「人気粗く」「無智蒙昧」とするばかりではなく、純朴・清廉とでも好意的にみなすべき民族性の一面が決して遺漏されていなかった事例のひとつであろう。爾後の便宜上ここにその当該箇所を原著より引用・併記しておきたい。なお、原典閲覧は <http://www.archive.org/details/moralclassbook00cham> に拠る：

THE PERSIAN PEASANT

No one is so high but he may feel the courtesy of the most humble, and no one is so humble but he may win applause by courtesy. This is because it is not the value of a favour, or of an act of courtesy, that we chiefly esteem: we more esteem the feeling from which it springs, and the manner in which it is conferred. For the same reason the greatest men, in giving the greatest possible favours, have sometimes won less love than the humblest have gained by very little favours, or things which were no favour at all. It was said of Charles I. that he granted favours in so unpleasing a manner, that they procured him less affection than some other kings gained by courteously declining to gratify their courtiers. A peasant meeting Artaxerxes, king of Persia, in one of his journey, having nothing to present to his sovereign, ran to an adjacent stream, and filling his hands with water, offered it to the king to drink. The monarch smiled at the oddness of the present, but thanked the giver, in whom, he said, it showed at least a courteous disposition. Such a peasant might be to appearance a clown, but his mind must have been by nature that of a gentleman.

(*The Moral Class-book* Chambers 's Educational Course- edited by W. and R. Chambers, William and Robert Chambers, London and Edinburgh, 1861. Digitized by the Internet Archive in 2009 with funding from Ontario Council of University Libraries.)

【参考文献】

- 大津忠彦 1998年、「ギーラーンを訪れた日本人先覚者たち」、『ギーラーン—緑なすもう一つのイラン—』、中近東文化センター、49-56頁。
- 1999年、「付記、明治13年ペルシア訪問団員について」、『chashm』no. 83、日本イラン協会、28-34頁。
- 2007年、「明治期先覚者吉田正春とその事績—「考古学」および「西アジア」の視点より—」、『人間文化研究所年報』第18号、筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所、157-170頁。
- 中岡三益 1985年、「外務省御用掛吉田正春波斯渡航一件」、『三笠宮殿下古稀記念 オリエント学論集』、日本オリエント学会、小学館、221-233頁。

- 西川如見 1708年、『増補華夷通商考』（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991284>：国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）
- 福沢諭吉（編訳） 1869年、『世界国尽』（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761278>：国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）
- 福田敬業（訳） 1875年、『地球説略訳解』（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761338>：国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）
- 古川宣誉 1891年、『波斯紀行』（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/988963>：国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）
- 吉田正春 1894年、『回疆探險波斯之旅』、博文館。
- 和辻哲郎 1979年、『風土－人間学的考察』、岩波文庫、岩波書店。

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）

